

曳博だより

January 2013



曳山博物館 〒526-0059 滋賀県長浜市元浜町 14-8

曳山博物館の進むべき方向とは

館長 中島誠一

明けましておめでとうございます。
本年も何卒宜しくお願い致します。
さて本年も難しいテーマに挑戦して行きたいと思
います。

早いものです。「博物館と町づくり」という内容
で、平成二二年、奈良においてシンポジウムが開催
され、その話をまとめたものが「博物館研究」に掲
載されたのも既に二年前のことです。その間、その
理念に沿って自分たちが行動してきたか、まずは軌
跡を確認しなければなりません。

さて博物館研究で掲げたマニフェスト(何だか懐
かしい言葉ですね)は次のようなものでした。

一、曳山博物館は本来のミッションに沿った展示を
二、まちの魅力を再認識してもらえような展示を
三、博物館の基本を踏まえつつ個性あるまちづく
りを

一の「ミッションに沿った展示」は、職員一同浸
透してきたと思います。つまり曳山文化を紹介する
というテーマが如何に広範のものであるかという
事実が分かり始めてきたのです。言い換えれば曳山
文化の切り口がアイデア次第で無数にあることを

実感し始めたということです。実例を挙げてみま
しょう。

①盆梅や秋の紅葉シーズンに合わせた「花々」、秋
の「紅葉」などの展示材料が曳山にはふんだんにあ
ることに気付く。そしてこれらの懸装品が曳山の歴
史を物語っていること。例えば曳山祭りは戦前まで
秋に行われていたので紅葉をモチーフにしたもの
が多い。

②子ども歌舞伎の外題をテーマに展示をすると、登
場する人物の再発見が可能。例えば源平布引滝の齋
藤実盛は合戦で華々しい最期を遂げ後世、武士の鑑
と称賛されるが、民間では、死後、実盛様という疫
神になって人々に危害を加える。その疫神払いの習
俗が各地に残っていること。

③長浜曳山祭の基本というべき三役は、時代ととも
に変遷しながら今に至っているという事実が数々
の資料から確認できること。例えば三味線弾きを取
り上げると農村部で如何に浄瑠璃文化が浸透して
いたかがはつきりと見えてくる。まぎれもなく長浜
曳山祭は湖北の人たちすべてで支えてきた祭りだ
であることが実証的に展示できるのである。このこと
は「三」湖北長浜の個性ある町づくりの目標と合
致しているのである。

①②③まで実例を挙げ展示効果について紹介し
ましたが、これに加え曳山祭りが内含する教育的効果
も最近アピールしています。つまり子ども歌舞伎を
成就する過程で、大人と子どもが如何に連携しなが

ら旨く人間関係を構築しているかについて、フォーラムを開催したりしています。

この様に曳山文化は無限の可能性を曳山博物館に与えてくれます。私たちはこの前人が与えてくれた有形無形の財産をぶれずに活用する、すなわち展示、講座、見学会そして市民との連携に役立てる、これが曳山博物館の進むべき方向であると信じています。

今年の博物館の予定をここで述べておきましょう。

A ここ二年で敷いた展示レールを維持していくこと。つまり三回の特別展と二回の企画展、そして二回の常設展。

B 二回の企画展の内、一つは長浜オールウェイズと称し、長浜にふんだんに残る写真資料を使い、昭和の長浜に思いを馳せつつ、未来の町づくりにつながる展示をおこなうこと。もう一つは長浜の農村部が支えてきた長浜曳山祭の実態展示をより進めること

C 講演会・見学会を実施し、曳山博物館の存在を広く知ってもらうこと。講演会は座学だけでなく体験してもらう講座に力を入れる

D 広報掲載は勿論のこと、ホームページ&曳博たよりによる最新情報の提供をおこなう。

E 曳山の保存・修理、博物館資料の薫蒸・保全にかかわる作業を継続して行うこと。

これらの具体的な目標を着実に推進していくこ

とが、リピーターの定着（入館者増）と公益財団法人としての本館の目指す役割（曳山文化の紹介・普及・伝承）に結果として叶うことになると思っています。そのためには皆さんのご協力が欠かせません。すでに山組の方々、展示説明ボランティアの方々の篤いご協力を戴いておりますが、これまで以上の御助力をお願いしましてご挨拶に代えさせて頂きま

ユネスコ無形文化遺産とコミ

ユニティ その①

大塚映明

新年早々「無形文化遺産とコミュニティ（地域社会）」というテーマで書くことと思つたのは、長浜曳山祭が「無形文化遺産」にも「コミュニティ」にも関係あるからではありませんが、別にこれは曳山のよ

うな大きな行事でなくても、村の祭りや儀式、これからまさにシーズンを迎える「オコナイ」であつても、今丁度展覧会をやっている「蛇の舞」であつても構いません。無形文化遺産とは読んで字のごとく、形の無いもの、しかし人々の身体をメディアとして

目の批准国となりました。この条約を読んでみますと、前文の中には、グローバリゼーションや社会の変化が、無形文化遺産の衰退、消滅、破壊の危機をもたらしていること、コミュニティ（地域社会）がその保護に重要な役割を果たし、文化の多様性と人類の創造性に寄与していること、若い世代がこれらの無形文化遺産の保護について知ることの必要性などについて書かれています。つまり、このような条約ができた背景には、世界的に無形文化遺産の存続や保護が脅かされている現状があるということがわかります。

この条約の中で、無形文化遺産は「地域社会や集団、あるいは個人が文化遺産の一部であると認めるもの」とあります。そういうものを伝える地域社会や人々が**主体的に**自分たちの無形文化遺産を定義し、認識し、価値を付与する（あるいはしない）権限をもっているのです。そのため、しばしば間違えられるのですが、かの有名な世界遺産条約でとられた「顕著な普遍的価値」を持つているものを専門家が認定するという方法は、無形遺産条約では採用されませんでした（この点で、新聞などで当初しばしば見られた「無形文化遺産（の代表リスト）」は世界遺産の「無形版」であるという表現は誤解を招いたと言わざるを得ません）。

全ての地域社会や集団にとって、各々が継承する無形文化遺産は他の地域社会や集団の無形文化遺産と比べることの出来ない独自の価値をもっています。そしてこれらの無形遺産は、「世代から世代へと受け継がれ、環境や自然、歴史に対応して常に

地域社会や集団によって再現されるもの」であり、「同一性と継続性の認識を与えるもの」です。常に再現され継続していること、すなわち、それらは現代に息づいているものでなくてはなりません。今に息づいているものとして維持され、また変化もするものなのです。もしそれらが地域社会にとつてもはや何の機能も意味ももたないものであるとすれば、やめてしまうこともあるかもしれません。しかし、それもまたライフサイクルの一つのステップとして受け止める必要があります。

このように、無形文化遺産を継承する人々の集合体であるコミュニティⅡ地域社会が、この条約の中では重要な役割を担うものとして位置づけられています。第一五条には無形遺産を創造し、維持し、継承しているコミュニティや集団、個人のできるだけ広範な参加を促し、マネジメントに積極的に関与することが謳われています。条約という国家間の取り決めに、コミュニティという言葉が極小の社会について書かれているというのは、なかなかすんなり理解しがたいところもありますが、自分たちが伝えられてきたものは、自分たち以外に伝えていくことはできないのだと考えれば、これも納得のいくことではないかと思えます。コミュニティが存在しなければ無形遺産も存在しないわけです。

では各地に伝わる多種多様で魅力溢れる無形文化遺産を継承していくにはどうすれば良いのでしょうか。これは正解のない問題です。いろいろ試行錯誤するしかないといってもいいでしょう。誰かがこれなら確実にうまくいくという方法を示してく

れば良いのですが、そんな魔法のような方法はありません。しかし継承のためのヒントのようなものを得ることはできるかもしれません。それは、各々の地域が培ってきた継続のためのノウハウを交換することによってです。私たちはこのようにやってきましたというのをお互いに出し合うわけですね。そのような、コミュニティのネットワークのようなものを国や地域を越えて作り出すことができればと思います。

なお、曳山文化協会では、二月九日(土)の一時三〇分から曳山博物館伝承スタジオで無形文化遺産に関する講演会を開催します。財団の長浜曳山祭行事・曳山保存専門委員会委員長であります植木宣氏と成城大学准教授で東京文化財研究所客員研究員の俵木悟氏をお迎えしてご講演いただきます。入場無料で申し込みも不要です。多数の方々のご参加をお待ちしております。

企画展「シリーズ曳山の美 百花繚乱」

中山芳章

長浜曳山祭においては、藤岡和泉のすぐれた建築意匠である曳山本体に加えて、曳山を飾る幕や彫刻、彩色、絵画などの装飾品が重要視されてきました。そのため、曳山の装飾品は時代の流行を反映し、変化し続けて次第に多く華やかなものとなり、現在の



孔雀山舞台障子「芙蓉四十雀図」

かたちとなりました。その中でも、曳山の舞台障子や楽屋襖などに描かれる花々は大変彩り鮮やかで美しく、絵画としても魅力的で価値のあるものだと思います。実際に、八木奇峰をはじめ長谷川玉峰、横山清暉といった当時活躍していた絵師たちによって描かれています。また、曳山に描かれた花々は、曳山を華やかに演出するだけでなく、曳山の舞台で演じられる子ども狂言(歌舞伎)の魅力を引き立たせる効果があります。たとえば、各山組の曳山の維持管理を行なっている中老と呼ばれる人々は、曳山の構造を活かした芝居をすることを望み、衝立などで美しい花の描かれた舞台障子や素晴らしい装飾が施された柱が隠れないようにするなど、曳山と芝居がより綺麗に見えるよう工夫を凝らします。描かれた花々に視点を移すと、長浜曳山祭は大正期まで秋に開催されていたため、秋をテーマにしたものが多く、なかでも紅葉をテーマとしたものがよく描かれています。それ以外にも菊や芙蓉、牡丹など美しい花々も数多く描かれています。今回の展示では、そうした曳山に描かれた美しい花々にスポットをあて、一月九日から開催される盆梅展と並び長浜のもう一つの花、曳山に描き出される珠玉の花々を堪能していただければ幸いです。



鳳凰山絵天井、牡丹が描かれた部分

【会期】平成二五年
一月二一日(月)〜三
月一〇日(日)
【場所】一階エアタ
イトケースおよび二
階企画展示室

「子ども歌舞伎フォーラム」 を開催しました

一二月九日の日曜日に市民交流センターで「子ども歌舞伎フォーラム」を開催しました。今回のテーマは「曳山祭が持つ社会教育力」で、最初に文化庁の委託事業で制作した「長浜曳山祭 曳山子ども歌舞伎編 く子ども役者たち華麗なる変身く」を上映し、そのあと参加者のお話に移りました。

民俗芸能学会代表理事の山路興造さんは、地域共同体にとって、祭礼などで子どもや青年が演じる芸能には各々の家の長男を教育する人間教育の場であり、重要な意味をもっていたと指摘。地域の人々の力を借りながら子どもの中に伝統文化の教育をするべきであり、そういうものを経験することが大人になった時の支えになると述べました。

滋賀県立大学講師の武田俊輔さんは、曳山祭は時

代の流れに適応しながら引き継がれてきたものであり、商家の跡継ぎである長男に限定されていた参加者が戦後は二男三男に開放された。また、シャギリを通して参加者が地域社会全体に広がり、女性の参加意識も高まったと述べ、街に在住している人だけの祭りではなくなったことが大きな変化であるとし、そして、役者が祭りを通して大人とのタテの関係の中で存在を認められ承認されること、自分が役者の時にももらった献身を役者にもするという連続性につながっていると指摘しました。また、学生が調査やボランティアに参加することによる祭りへの貢献についても述べていました。

歌手の北川陽大さんは、五歳、八歳、一一歳の時に役者として出た経験から、出る前は内向的な性格で何をやるのかも全くわかっていなかったが、回数を重ねることによって、ちゃんと演じなければいけない、年下の子の面倒を見なければいけないという自覚が芽生え、立場を与えられることで成長したと語りました。そして、都市化してはいるがコミュニティができていない南部の例をあげ、長浜では子どもを主役にしようという目的で一つになっており、子どもを元気にしていくことこそが必要と述べました。

長浜市教育委員で翁山の中老でもある桐山恵行さんは、役者・若衆・中老の三世代の中で、それぞれの世代が下から徐々に責任ある立場になっていくシステムの中に世代内教育があり、常に役割を与えられていることが、やりがいを感じることにつながっていると述べました。また、自分自身は大学に



かないと祭りを継続していくのは不可能であり、山組外の人でも参加していただけるのであればそれは磁場になると語りました。

長浜城歴史博物館館長の片山勝さんは、学校はこれまで伝統文化の教育力に気づいていなかったのではないかと、また、これまでの教育が、学校の教員だけで完結させようと思いついてきたのではないかと指摘しました。そして、長浜西中学校の校長として伝統文化学習を推進した立場から、西中でのシャギリや三味線の授業を紹介し、地域の人々から教えを乞うことによって、教員ではできない、伝統を受け継ぐ方途を感じ取ってもらうことが重要と語りました。

このフォーラムの様子は「STUDIO こぼく」の動画でご覧いただけます。(大塚)

なつてから長く長浜を離れて曳山には一切かわっていないが、長浜へ帰ってきた時が丁度出番の年であり、祭りの持つ“特殊な磁場”に惹きつけられて、以降ずっと祭りにかわるようになり、三役修業塾で太夫もするようになった。そして、少子高齢化の現在はいろんな縁をたよっている